

演、パネルディスカッション、コーディネーターは神

「Port To Port」のタイトルのもとに様々なイベントを企画している。まず映画は港を舞台にした話題作20本、それに付随するイベントは山田洋次、山田和夫、高畑勲、野坂昭如各氏による講演。また前夜祭がルミナス神戸船上で行われる。

る場所柄、今年も、ＪＣのイベント企画への期待は大きい。協会はここ三年、雨にたたられている「神戸まつり」だが、おまつり広場（東遊園地）の舞台への配慮などに頭をいためている。メインフェスティバルへの参加申込みは、神戸市民

(K)

誕生日ありがとう運動本部
651神戸市中央区御幸通八十一
六神戸国際会館一階郵便局の隣
☎〇七八―二三―二二一四

祭協会（神戸市役所市民文化課内）078（331）8181（代表）／パレードや各ひろばへの参加。

★神戸ゆかりの芸術家が勢ぞろい

温暖な気候、港町としてのハイカラな気風、このような風土に育まれて、数多くの芸術家の芸



中開催、神戸に美術関係の特別展、人気に

おいては昨年亡くなられた小磯良平を始めとして、巨匠が勢ぞろい。

神戸市立博物館では2月10日より特別展「神戸ゆかりの巨匠たち展」が開催されており、多数の人が毎日つめかけている。洋画の小磯良平、金山平三、日本画の橋本関雪、東山魁夷、彫刻家の柳原義達、書家の安東聖空、版画の川西英ら合計12人、200点の作品を一堂に展示。特に日本画、洋画を代表する東山魁夷、小磯良平の作品が初公開も含めて合計41点。3月26日まで開催されている。

●神戸市立博物館 3月10日035
★ファミリアのマタニティセミナー

働く女性たちが増え、マスコミでも「男の子育て新

時代到来か！」など、センセーショナルなタイトルが見られるようになり、ある程度の男性の育児参加は社会現象として現われてきている。

1月28日（土）午後1時半から元町・風月堂ホールで行なわれた「第19回ファミリア・マタニティセミナー」は「子育て談義」。

第1部は人気落語家・桂べかこが子育てや夫婦のありかたについて独自の男性育児論



育児論を語る。第2部で

「男の子育て」をテーマとして様々なシンポジウム？な子育てファッションが披露され、第3部では新米パパの奮闘記をスライド等で紹介。なごやかな雰囲気の中で様々な形の「男の育児」が見られた。

★歌に生き、劇に生き
○団員募集のお知らせ
○オペラの火を神戸で燃え

上からそう
オペラグループ「ALADIKOBE」では、共に活動する会員を募集している。このグループは音楽

大学出身の若手で構成され神戸を中心に年2回、2年に1回自主公演を行う他、

学校公演などの啓蒙活動を行って



オペラの楽しさを伝えたい。音楽好き、オペラ好き、音楽好きは注目。

募集要項
●募集人員：①各パート若干名②スタッフ（伴奏ピアノリスト、制作スタッフ）
●受験資格：①の場合、音楽大学卒業者又は同程度の実力を有する者。申し込み方法等お問い合わせは221-3959 濱崎加代子さんに。

演劇に人生をぶつけた人

オリンピック選手のようにプロ以上のものを目指すアマチュア劇団「劇団ふおるむ」では、演劇に情熱を燃やす人を募集している。



劇団ふおるむの拠点として、阪神間のホー

在積極的な演劇活動を行っている。

●第16期演劇スタジオ生。試験日：4月2日（日）。申込締切：3月25日。問い合わせ、募集要項及び願書請求先60円切手10枚同封の上、〒658神戸市東灘区本山南町7丁目3-15 308 小林さん方まで。412-3008。

図書ガイド



正平調 神戸新聞論説委員室

「七百字の小宇宙」正平調は神戸新聞朝刊に、毎日連載されている人気コラム。この本は昭和60年から63年に及ぶ正平調の中から、20余りを選び編集したもの。昭和の木の数年間の世相が、あざやかな切り口で描かれており、飽きさせない。文章を書くHOWTO本としても格好の一冊。1200円V



いざやかふか んひょうこそ 名生照雄

生粋の兵庫・子である著者が1956年以後、様々な媒体に書いてきた文章を一冊の本に編集。郷土史、民俗と芸能、教育、音楽、郷土史、紀行の6章から成り、神戸の歴史から、モーターカールトに阪急電車、はてはアメリカ見聞録まで、どこから読んでも楽しめる一冊。A鹿野社刊1300円V



北陸の店、あの味、朝日新聞富山支局・金沢支局・福井支局

1984年に朝日新聞大阪本社管内の各支局が持ち回りで企画した「この店・あの味」は大変な反響を呼んだ。この2冊はその北陸3県版。味の慢の1店1店が、新聞記者の適格な目で捉えられており、充実した味処案内となっている。10月社刊 各1200円V

★カメラを構えたあなたを

モードピアは待っている
オールスタイルグループ
の社屋モードピアは、美しい建物と周囲に配された彫刻、庭園でフ



モードピアの写真をアッシーンタウ内園でフ

たびファッショントウン街
びらき協賛イベントの一環
としてモードピアの写真を
募集している。優秀作品は
11月11日・19日、モードピ
ア1Fで展示される。

。テーマ：建物そのもの、彫刻、庭園を含む。人物が入っても可。サイズ：カラブプリント、四ツ切り以上。

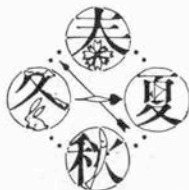
応募先：作品の裏面に住所、氏名、電話番号を記入のうえ、〒6500中央区港島中町6-15-1「モードピア」オールスタイル総本社 写真コーナー係まで 302-3311
。撮影期間：3月13日(月)まで。
賞：最優秀賞1点(10万円) 優秀賞5点(5万円) 入選数点(3万円)
。締切：4月7日(金)必着。

★鉄6mをプレゼントノ

ビタミンC 500mg、鉄6mgを主成分とした「シーマックス500+アイアン」が3月20日、大塚製薬より新発売される。

鉄分の不足が現代人にとってひとつの問題となっている。そこで鉄の吸収が良いとされるビタミンCとの

花 時 計



「文化創造」にこの一手

「文化の時代」がやってきた、とか「真の豊かさ求めて」、とか。あるいは「ふるさと創生」など、表現は多少違っても帰するところは同じようなものだ。いわば「文化創造の時代」というべ

組合せによって、両者をバランスよく摂取できるよう開発されたのが本製品だ。



シーマックス500+アイアン

溶かすだけで、その場で飲めるこの「シーマックス500+アイアン」(二箱4個入300円)を10名の方にプレゼント。

■ハガキに住所・氏名を明記の上〒590神戸市中央区東町10-1大神戸ビル9F月神神子「シーマックス500+アイアン」係へ、3月31日迄にお申し込み下さい。

きだろう。しかし、いろいろ言っても文化づくりの道は遠い。何んといっても「文化づくり」にはお金がかかるのである。これが究極の問題点なのである。その解決の糸口を掴まない限り「文化づくり」は絶対に無理なのである。

この解決策は文化基金や財団基金、これしかないのだ。平成元年、自治体の中で、まず大阪府が目を見張るような予算を組んだ。新設、増額する基金と財団の基本財産

●KOBE POST

★ホテルオークラ神戸(代表取締役青木宣雄)より、平成元年一月臨時株主総会で、代表取締役大石邦雄、取締役森道彦、取締役投資令幸、取締役望月恭夫、常勤監査役長島寛代らの役員選任のお知らせがありました。

★40周年を迎えた株式会社紅屋(代表取締役松谷富士男)より、一月の役員会で、松谷信子取締役副社長、松谷年郎専務取締役、松谷至博常務取締役、取締役松谷富士夫、湯浅俊寛、徳永和彦、監査役に木村広見代が選任されたとの報告がありました。

★三月三十日筑前稲穂の上原まりさんが松尾寛(松尾芸能財団/現大阪歌舞伎座社長)を受賞され、受賞式が行われました。

★園田学園理事長の一谷定之(仮氏名)が、二月一日に敗血症のため死去されました。ご葬儀は須磨の西極楽寺で行われたいと願っています。

★一月二十一日神戸大学教養部の田口寛治先生が、肝不全のため死去され、一月二日にご葬儀が。お二方のご冥福を心より祈り申し上げます。

★二月十日幼児教育と、エスコラ・ジ・サンバ・オーパのチームリーダーであった田中和生さんが亡くなりました。二月十一日神戸市教会館で告別式がとり行われ、サンバで仲間たちが別れの演奏を行いました。さようならゴリさん。

★長唄の片屋勝壽治師が、師範三十周年を迎え「長唄とはる会」を三月十九日大阪国立文楽劇場(11時開演)、三月二十一日神戸文化ホールで演奏会(12時開演)を開かれます(3,000円)。

★佳生流家元西村義孝さんの「絵・写真・いけばな・書」多彩な世界の豪華個展が、三月十五日(水)十九日(日)午前10時午後6時/兵庫県立美術館特別展示室1Fにおいて開かれます。

△Y△

■丹波・但馬と神戸を結ぶ文化交流サロン

小鼓会だより

梅の下 お福遊びし 石今も 槐庵子



左上は美しい西山酒造の新しい三鼓蔵の前で。上中は春日局産ぶ湯井戸。右上は興福寺のお福石／右下はしほり立ての小鼓を呑む会員。左青木杜氏と西山社長／左下は城崎西村屋でかに料理、左より松井夫妻、国清、市野会長、外山夫妻、西山社長、栗山さんら。

暖冬異変の二月十九日。日曜日の朝は、ほどよい暖さ。小鼓会の一行為、春日局のお福が、丹波の地に夫に従い訪れるNHKドラマのような気分です。神戸を出発した。

おふくの生誕地は全国四カ所にあるらしいが、氷上郡春日町黒井にある大梅山興福寺は、黒井城の下館で、庭にある「お福石」は白梅に彩られて愛らしく、うぶ湯を使った「お福井戸」と共に、戦国時代の昔をしのぶ風趣は充分あり、あまり整備をしないでほしい界限でもある。

今年の美酒小鼓の出来はいかかと、市島町の西山酒造へ。西山裕三社長と青木卓夫杜氏の名コンビの酒づくりには訝が見えて、しほり立ての吟醸と生酒のコクと清々しさは見事。綿貫宏介先生デザインの三鼓蔵は、新しい酒蔵づくりのたまたま見せて美しく、瀬郷もぜひ見習ってほしいもの。

昼は、グルメリア但馬で但馬牛のランチで小鼓を愉しみ、一路城崎へ。西村屋旧館の落ちついた雰囲気は湯の宿らしい風格があり、お馴染の暖かさ。霊泉の間で約三十名が集い市野弘之会長が乾杯の音頭を。堀郁子さんの唄、花柳芳恵一子、松本尚詩師の一舞。そしてかに料理に美酒小鼓に酔った。

(小泉)

「小鼓会」花の宴ごんない／四月十四日
(金) 於／千人代官(三宮) 会費六千円／入金金・千円／お申込・月刊神戸 078
(33) 2246

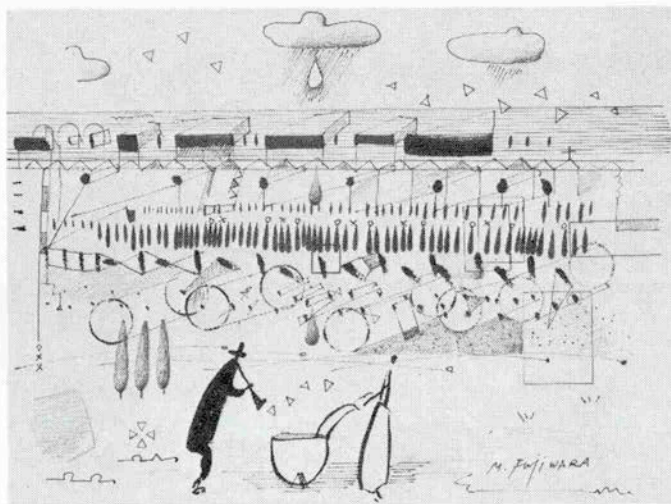
ショート・ショート

ワン・シーン・オブ・神戸

春を放つ

釜谷かおる

カット・藤原 護



木瓜の花が咲いていた。

木肌の銀茶、新芽のきみどり、そしてこぼれるように開いた花びらの紅。鮮やかすぎる色彩をまとって、まだ背丈の低いその木は、芝生を敷きつめた庭の端っこのほうで、つんとすまして立っていた。

「うわ、きれい」

思わず麻子は言った。モデルハウスそのままをとり入れたという、洋子好みの吹き抜けの家。気恥ずかしいほどモダンなその家を背景にしても、ちっとも不釣合でなく、木瓜は独自の世界をそこにもっていた。

「木瓜は別名、放春花っていうんですって」

庭の見える居間のテーブルに、ガラスのハーブティーセットを運びながら、洋子は言った。

彼女の新築移転の便りを持って、初めて訪れてきたというのに、肝心の住居よりも麻子はその木瓜の花にひどく心魅かれてしまっていた。だから洋子が、子供のピアノのレッスンをかたづけちゃうわねとその場を中座しても、ちっとも気にはならなかった。

大きな白い窓の家、芝生の隅の木瓜の花。ガラスポットの中で琥珀色が揺らぎ、快いメヌエットが流れてきて……。絵に描いたみたいな生活がここにはある。

ああ、疲れてる。麻子は自分の中に、泥のように堆積した疲労を感じた。友人のささやかな生活を、ほんの少しでもうらやんだりするなんて。ファッション業界の最前線で、デザイナーとしての才能をめいっぱい生かして仕事に打ちこんでいる麻子だったのだ。

確かに、このところ徹夜も続いていた。しかし何よりも、隆之からの電話を待ち続けた日々に、心底疲れきってしまっていることを、麻子はよく知っていた。

ふと、一人暮らしの自分の部屋を思う。極力、無駄な物を置かないモノトーンの室内は、忙しいキャリアウーマンの麻子にぴったりだった。ただ一つ、クラシックな白い電話がそぐわない。装飾過剰なロココ風。眠るためだけに用意された室内で、その電話をとる時だけ生身の女にもどる麻子の暮らしが、一目瞭然に見てとれる。オトコも創造力には栄養よ。うそぶきながら、隆之の来る夜には、セントポーリアの小鉢とアウスレーゼの瓶とがテーブルの仲間になって、麻子の部屋はほんのいっとき、生きてる楽しさのある場にかわる。

でも、洋子のこのおだやかな午後にはかなわない。

いまごろその電話は、麻子と呼び出すコールをくり返しているだろう。やっと会えることになった、こんな早春のおだやかな日曜。その約束をすっぽかして、麻子は友人の家なんかを訪ねている。十パーセントの後悔。そして残り全部で、彼の思いどおりになる女じゃないよと意地をはる。でもその十パーセントが重すぎるのは何故だったのだろうか。

ほんやり庭に目をもどした麻子は、あっと声を上げそうになった。

鶯が来ている。——それも、一羽、二羽、三羽。

木瓜の紅と鶯の灰緑。その強烈な色彩は、中国の絵画そのままだ。そして絵以上の気品がその静けさの中にある。

花に戯れる鳥を止まらせ、木瓜の枝はたわんでいた。重そうにしながら、しかし花は美しかった。美しくあり続けようとする意志のようなものさえ感じさせる。

まるで私のようだ。——何の脈絡もなく、麻子は思った。仕事、ひとり暮らしの生活、妻子ある恋人。そんなものを、自らの細い枝いっぱいに止まらせて、それでも女ざかりの紅を、傲慢なまでに咲かせようとしている。けれどもいくら豪華に、咲き続けることをやめなくとも、その紅は、何をも実らせぬあだ花にすぎないというのに。

風が吹いた。

枝のそよぎに驚いて、鳥たちは一瞬のうちに飛び去った。

花はそれでも、紅かった。

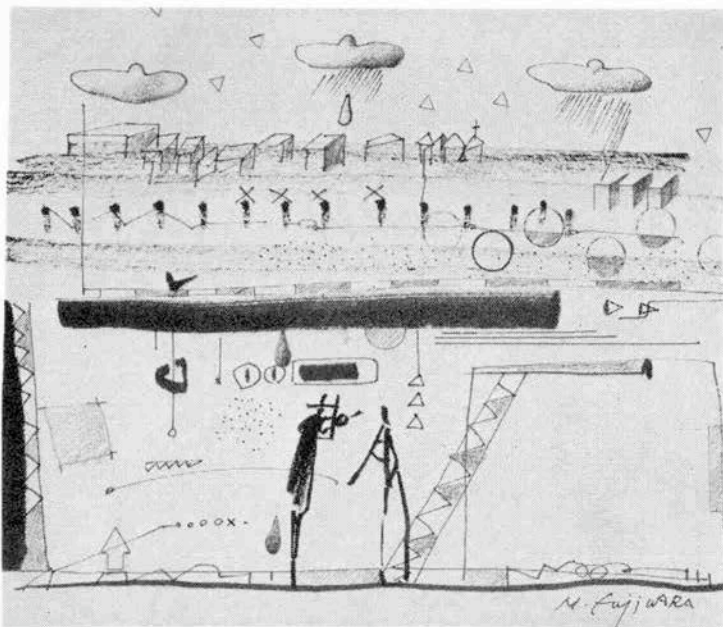
放春花。花のもつ、もう一つの名をつぶやきながら、麻子は思った。私も自らの春を放してやろうと。



△著者紹介▽

昭和31年生。神戸女学院大学卒業。中学校講師勤務後、フリーライターに。主婦業の傍ら創作活動を続け、「夢食い魚のブルー・グッドバイ」で第12回神戸文学賞を受賞。元「随筆こうべ」同人。高砂市在住。今春、新潮社より同作品の長編化したものが発行の予定。

いつまでも春をここに、つなぎとめておくことはできない。やがて桃や桜がとってかわり、木瓜の朽ち果てる時がやってくる。後悔の占める割合が十パーセントしかない今こそ、肩の力をぬいて季節の移ろいに応じていける。鶯の飛び去った虚空をかえりみることもなく、あいかわらずつんと、濃い紅をそこにとどめる花は、麻子の心にさわやかだった。



お夏

門田 露もん でん つゆ

絵／大橋 良三

3

数年して、だれもが思いもかけないことであつたが、
姫路の但馬屋の本妻が急逝した。

一人の子も生さず、小商いから身を興して豪商にのし
上がった九左衛門の背後で、抜目なく算盤を弾いてい
た、ともいわれる人であつた。

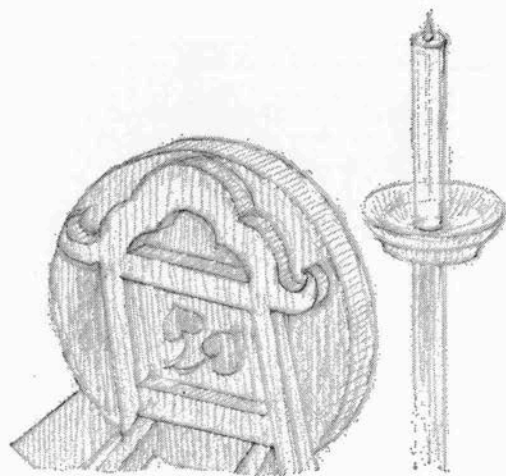
「まだまだこれからちゅう時に亡うなるのも不憫なもの
やが、姉さん女房やし、しょうおまへん。多少はええ目
もしたことや、そんでこらえてもらわにゃあおう」

周りの者が、呆氣にとられるほど九左衛門はさっぱり
としていた。

陰で交わされるひそひそ話も、耳には入ってこないよ
うであつた。

「馴染みの遊女を、家に入れるそうやで。この店も、も
う仕舞いやな」

「そうでもないやろ。若いべっぴんさん貰てあいつも若
返れまんがな」



まるで涎でも垂らさんばかりの者もいる。

九左衛門の、室津通いが頻繁になってきた。

それは、寂しさを紛らすというより変身の早さという九左衛門の性格のようでもあったが、百箇日がすむのを待ち兼ねたように卵の葉となつて前にして言った。

「こんで忌明けもすんだ。どやろなア、今度は二人が姫路に来てくれるちゅうのは」

九左衛門の目が、どっちも異存のあろうはずないわなツ、というふうになりと笑っている。

事実、卵の葉にとっては、九左衛門に身請けされた時以上に、二度とは考えられない仕合せな話であった。

しかし、卵の葉は内心、三十路を半ばにしての住み換えの不安よりも、幼い頃から花柳の色に染めぬかれた身を、たくさんの奉公人を抱えた賢気の商家にうまく馴染ませられるかどうか迷っていた。

「うちのようなんに、務めおおせられるもんでつしやるか」

「あれこれ思い煩わんでも、おなつのためや思たらええがなツ」

「へえ」

心を決めたあとも、時には卵の葉らしくない優柔さを見せることはあったが、考えても訟無いは潔く思い切るのも卵の葉であった。

艶やかに結び上げた流行の兵庫髷を、奥方らしい片髷に結び直し、さらさらしい着物を脱ぎ棄てた。

「そないに気い使わんかてなア、おまえの気風と貫禄なら、どないなもんでもすぐに手懐けられまんがな」

「おおきに。それでも、人はなア、いっち始めが肝心、いうやおへんか」

九左衛門は卵の葉の意外な生真面目さに先を越されたかたちで、面映ゆそうに二の句をひっこめた。その顔色には、氣に入った女と娘を一度にわが懐に入れた男の余裕が、ありありと見える。

九左衛門の出自は、但馬の奥だときいたがどのように

才覚を駆使して蓄財に成功したのか、姫路本町で営む米間屋は、近在でも有数の大店である。

その頃江戸寛文期は、人々の身分の差は室町期よりも強められていたが、反面、財力を貯えた者が、貴族や武家の経済的に非力な者を凌いで台頭してゆける下剋上の時代でもあった。

そういった意味でも九左衛門は、数年連続して勘定所御用達を許された、名実ともに豪商である。

なつの分も取り混ぜて、姫路へ持って行く衣装をあれこれ品定めする卵の葉の、思案深げにかしげた細っそりした項をいとしげに眺めやりながら、戯れるように言った。

「お・あ・き・：：やったなア」

卵の葉は、潮騒の中から、父が呼ぶ声を聞いたような気がした。

源氏名に驅ごと漬ってしまっていたような卵の葉に「おあき」という実名は、身振りするほど新鮮で嬉しい響きがあった。

「果報者じやのう」

よく日に焼けた父母の、荒くれたしわにまぶれた笑顔と声が、浮かんで消えた。

「おおきに：旦さん」

俯いた卵の葉の目から、たたんだ着物の上に涙が糸を引いてこぼれ落ちた。

なつを連れて、姫路に移ったおあきは、生きて夢を見られる仕合せを噛み締めるようにいそいそと励んだ。

東の空が白むと起き出して、日の入りまでに家業を終える生活に軀を慣らせるのは、全身の血を入れ替えねばならないほど辛い作業であったが、奉公人たちが引き上げた後の九左衛門とのしみじみとした夫婦の生活が、日毎おあきを生きかえらせた。

なつは、但馬屋の跡取り娘になってからも母おあきの在りようとは反対に、おっとりとした容姿であったが、かつてその可憐さに好意が持たれたようだ。

最初から、おあきには何かと批判がましい目を向けていた年のいった女中頭のお梅も、なつには、始終、猫なで声を出していた。

「これはのう、先の奥さまの形見でござりますよッ。なつお嬢さまが使つてくれはるのを待つていたようござります」

言葉遣いまで変えて、おあきに対してこれ見よがしに、刺しゅう入り半襟や巾着をなつに渡した。

いつだったか、おあきがうっかり朝御飯をお供えする居間の大黒さんを、金精さんと呼び違えたといつて、お梅が大げさに騒いだことがある。

「これやさかいに、水違いのお人は、恥かしいのんやッ。なんぼ金精さんあつての身か知りまへんけどなッ」

「つい、うっかりしてましたんだす」

「知らんまに、思ってもないことが出てしまうことの方がこわいのやおへんかッ。人の品位は氏より育ちいますよつてなッ」

お梅は、耳もかなり遠くなり、しよぼしよぼとした目は見えているのか見えてないのか判らない程であつたが、年下の女子をへこませることぐらい難ないようである。

おあきは、ある晩、思い余つて九左衛門に聞ねだりをしてみた。

「……お梅ももう年のようでつしやる、暇をとらせるわけにはいきまへんやろか」

九左衛門の首に、二の腕を絡ませながら何げなくそう言つと、おあきは滑るように呼吸を合わせていった。

男が欲望を果す前に、何かをねだるという遊女の習性が、ふと軋の芯で軋んだ。

背中に、かすかに冷たい水が流れた。

「なんぞ、あつたのか」

九左衛門は、童子のように無心にまさぐつていたおあきの乳房をはなした。

おあきは、興醒めしたような気配のする九左衛門の眸

の中に、普通の女に生れ変われそうもない自分を映しとつてたじろいだ。

何ともいえない悲哀が胸の裡に広がつてゆき、想像もしていなかった所へ自分が沈みこみ、足場をすくわれそうな不安を覚えた。

「いえ、大したことやおへん」

「お梅にはなッ、一生養つてやらにやならん借りがあるんやッ」

おあきから身をひいて、布団の上に起き上つた九左衛門は、すっかり白けて退めた目をしている。

「すんまへん。気のきかんこというてしもて」

九左衛門の腰にすり寄つたおあきを、慣れた仕種で膝枕させ、自分で引き寄せた煙草を一口喫つて、おあきにも喫わせた。

おあきは甘えた仕種とは反対に、燃え切らずに冷めた心を持て余しながら、夫婦というものの果てしない重さと、形もなく擦れ違つていくことの怖さを噛み締めていた。

半年ほどして、おあきが、思いつめた表情で九左衛門に頼んだ。

「わてにはなッ、どうしてもこの内儀は、荷いが重すぎて務まりまへん。手かけでも、足かけでもかましまへん、どうぞ室津へ去なしておくれなさいなッ」

まるで、膨らみ切つた風船が音たてて萎んでゆくような風情であつた。

「致し方ないわなッ」

あまりの素気無い九左衛門の物言いに、傍にいたなつが思わず声高に、

「お願い。母さまを一人にさせないでッ」と、いった。

九左衛門は、おあきとなつを交互に見やつてからなつに向つて、

「お前は、但馬屋の跡とり娘やいうことを忘れたらあかん」

と、いつにない厳しい口調でいった。

なつは、口にこそ出さなかったが、その時初めて父に微かな憎しみを覚えた。

大人の世界のことはよく分らないとしても自分の都合ばかりで、あっちへ置きこっちへ置きするのなら、慣れない世界での苦境を救うてやるのも男の務めではないのか、と思えてならない。

しかし、なつは、幼い頃からそうであったように、父も母も遠くに見てさびしいとも言わず、ゆっくりと自分の世界を作っていくしか方法を知らなかった。

おあきは、意外にさばさばした表情で室津に帰って行

った。なつは時々、元の源氏名に戻った卯の葉が、一人で長火鉢の傍に片膝を立て、煙管をこんこんと打つ嘆息まじりの声が聞こえて来そうな気がする。

「わてはなア、この水が一番、具合がよろしmanınやつ」

なつは、一人になって思った。

母は、老いた女中頭と肌合いが合わずに帰ったというよりも、小女から叩き上げられておしよくを張って来た芸事や、行儀作法が、普通の家庭で女子に厳しく仕付けられている貞女の道とかいうものに弾き出されただけに思える。



どちらが良いとか悪いとかではなく、
「女の運は、出会った男次第やでッ」
といった母の言葉が、妙に心に残っている。

実のところ、無駄な後追いもせず、大様なところを見せた九左衛門にも、女や子供の事どころではない問題が持ち上っていた。

数日後、室津の卯の葉から、手紙が来た。

武家の奥方でさえ、読み書きの出来ない女のいた時代であったが、なつの手紙に添えて「お礼状」なるものが字の読めないお梅に託されてあるのを見つけて、なつは、母の意地を見る思いがした。

肩をすくませ、折りたたんだお梅への手紙を、帯の間に仕舞った。

なつ宛の手紙は、よほど急いたとみえて、卯の葉らしくない乱れた手蹟が、いつもの語り口そのままに並んでいる。

「昨日、佳代があの世に行きました。お父さん(廊主)の決めた水揚げの相手が、いややうてこ十数日、御飯も食はず水も飲まずでしたんや。妓夫太郎が、遊女を丸損した腹いせに見性寺に投げこんで、たまたまその話を聞いた酒屋の清さんが寺に駆け込み、幸か不幸か虫の息ほどあった佳代の最後を見てやったそうや。

そやけどなア、今度は清さんが、どがいなことしたのやろか、佳代との心中の片割れにされてしもうて、埒が明かんさかいに、暫く姫路の但馬屋さんで預かってもらうことにしましたえ。おなつも親類のお兄さんや思うてようしてあげるように……」

手紙には、佳代が死んでしまった事と、何故か清十郎が佳代と心中して生き残ったというようなことが書かれていた。

廊では、幼女を買い受けた場合、数年間は遊女の予備として見習いさせながら小女にして働かせ、十二・三で水揚げと称して初めて客をとらせる。

その時の玉代は、普通の何倍もするのが常で、そこに

目をつけた廊主が、助平たらしい男を騙せるだけ騙して一人の遊女を何度も水揚げさせて荒稼ぎをするのだ。

佳代は、なんとかしてもう少し先にして欲しいと泣いて頼んだが、聞き入れられなかった。

「お前かて、なんぼ逆ろうたかてあかんことぐらい、よう知つとうやろ。それより、母あはんが泣くこと考えてみいッ」

しかし、佳代は断食してまで拒み続けた。

清十郎が、駆けつけた時はカサカサにひしなびた佳代の唇が、びくりと一度動いただけであった。

佳代を抱いて、その無惨な死を見つめているうち、清十郎が、うろろろしていた妓夫太郎に向かって叫んだ。

「わいが、佳代と死のうとして死に切れなんだんやノ」
「おまえ、正気か、もう一遍いうてみい。ほんまにええのか？」

妓夫太郎の方が、ど肝を潰して何度か聞いた。

当時、心中者の生き残りは、罪に問われた。

清十郎の言動に仰天したのは、父親の泉屋清左衛門同じで、なんとか事件をまるめこむために奔走した。

妓夫太郎の方も、佳代を死なせてしまった廊主への言いわけに、清十郎が心中したことにしてくれたのを幸いに、洩る素振りを見せながらも金をせしめて承諾し、事件をもみ消した。

「佳代ちゃんが死んだ。そして清十郎さんが熱が冷めるまで但馬屋の手代になる……」

なつは、手紙の内容をなぞってみたが、すぐには悲しみも悔しさも覚えなない。

白くぼやけた記憶の向こうに、鮮々としたものを見つけたのは暫くしてからであった。

「佳代ちゃんは、清十郎さんのことを、待ってはったんやッ」

きつとそうや、と思ったとたん脳裏に浮べた佳代の嬉しそうな顔が歪み、手紙の字も周りもかすれて見えなくなった。

(つつく)